

国宝『信貴山縁起絵巻』第一卷「山崎長者巻」に関する一考察

大西 春香

はじめに

小稿では、国宝『信貴山縁起絵巻』第一卷「山崎長者巻」を取り上げる。この巻が、在家の善知識として仏道を勧める仏教者と、仏教者により功德を得る在家を語る一巻であったと解釈できることを指摘する。

国宝『信貴山縁起絵巻』は十二世紀後半に成立した社寺縁起絵巻である。三巻に仕立てられたこの絵巻には、信貴山中に籠り毘沙門天を勧請して様々な奇瑞を行った、修行僧命蓮（生没年未詳）に関する説話が描かれる。奈良県生駒郡にある信貴山朝護孫子寺が所蔵し、一九五一年六月九日に国宝指定された。現在は奈良国立博物館に寄託している。

第一巻は、絵のみを伝える。本来は他の巻と同様に詞書を備

えていたと推測できるが、現存する絵巻は詞書が欠落している。そこで、『今昔物語集』巻第十一「修行僧明練始建信貴山語第三十六」（以下、『今昔』所収話）との比較から、第一巻を作成する上で『今昔』所収話と同話の記述が参照されたと考えられることを指摘する。

また、第一巻に描かれる飛鉢に関して先行研究では、命蓮が布施を怠った長者をこらしめたと解釈されている。しかし、そうではなく、在家と仏教者との理想的な関係が築かれていると読み解くことができる。第一に、何故に命蓮が倉を留め置いたのか。在家である須達長者の寄進譚を先行事例として複数の例が確認できるように、絵巻では在家である長者から命蓮へ堂舎が寄進され、長者は造堂の功德を得たと考えられる。そして第二に、何故に命蓮が米俵を全て返したのか。『今昔物語集』に

食料備蓄により罰が当たたる仏教者の話が確認できることから、命蓮が戒律により禁止される食料の備蓄を嫌ったと解釈できる。以上より、第一巻は戒律を重んじる命蓮の、在家の民衆を対象とする教化を語る巻であると指摘する。

一、詞書と関連説話に関する先行研究

絵巻はまず詞書が記され、続けてその内容に対応する絵が描かれることで巻を構成する。しかし先述の通り、国宝『信貴山縁起絵巻』三巻のうち第一巻のみ詞書が欠落している。

国宝『信貴山縁起絵巻』の関連説話として指摘されてきたのは、『今昔』所収話、『古本説話集』巻下第六五「信濃国聖事」（以下、『古本』所収話）、『宇治拾遺物語』巻八第三「信濃国聖事」（以下、『宇治拾遺』所収話）の三話である。詞書について論じる際には、主に『古本』所収話と『宇治拾遺』所収話が用いられてきた。以下、詞書と両説話とに関する先行研究を挙げる。

まず、詞書と『宇治拾遺』所収話との比較、考察が行われた。下店静市氏は「信貴山縁起絵巻詞書の問題」¹⁾において、

文章自体と云ふ点よりみて、詞は平安朝特有の和文である

に対し、拾遺は仮名交り文であり、文語体となっている。（略）用語はこの時代の上流の口語に基づくものであり、その音を為した仮名を主とするし、文として主語の省略があり、だからだと書き流した句切の明確でないものである。文字として稀に人とか僧正とか東大寺とか、ほとんど数ふほどの漢字を用ふるばかりで、余はすべて仮名である。拾遺はこれに反して主語を加へ、口語を漢語に改め、区切を簡潔にして段落を整へ、文意を明瞭にせられてゐる。これによつても拾遺の改変は明らかである。

と述べられ、詞書と比べ『宇治拾遺』所収話の内容には改変があることを指摘された。また、佐藤信彦氏は「信貴山縁起絵巻の言葉―その語法に就いて―」²⁾で、「或る説話が語り伝へられ、時に筆録されてゐるうちに、一方は信貴山縁起絵巻の詞となり、一方は、明らかに鎌倉期の語法を有する宇治拾遺の一條となつた、と考へられる。」と考察され、各話の成立背景についても述べられた。

そしてさらに、『古本』所収話を含めた考察が行われた。藤田経世氏は「信貴山縁起絵巻の詞について」³⁾という論文で、

このように宇治拾遺以外の本に「信濃国聖の事」と同じ内容の説話が収められている事実は、信貴山絵巻を宇治拾遺から開放して考えねばならないことを、はっきりと指し示すものである。(略)即ち、信貴山絵巻はそれ自身独立に製作されたものではなく、絵巻以前に既に一定の形にまとめられた説話があり、それをほとんどそのまま詞としてとり入れ、絵巻の形に作りあげたものと推定させる点である。(略) 絵巻、松田本(『古本説話集』のこと・筆者注)、宇治拾遺といった順序が考えられないとしても、これらに共通したものを想定し、すべてがこの共通の源から発したと見る方が、ずっと自然であろう。

と、各話の成立背景についてより詳細に考察された。また、大串純夫氏は「信貴山縁起絵巻の詞(承前)―絵巻研究の序説として―」⁽⁴⁾において、

先づ絵巻が出来、今は亡びた説話集Xが絵巻の詞を採録し、その命運説話の一つは宇治拾遺に残り、一つは梅沢本(『古本説話集』のこと・筆者注)に転写されたということになるわけである。(略)もしも、今昔を(片寄氏の御説によつて)

千百年代とし、拾遺を(後藤氏の御説によつて)千二百年代とすることが許されるならば、今昔より拾遺に関係の深い梅沢本の成立は、当然十二世紀後半か十三世紀初葉ということになるであろう。そして、宇治拾遺や梅沢本より更に古いと考えられる信貴山縁起の成立は、十二世紀中葉から後半にかけての頃ではないかということが、一極めて不確実にはあるが―想像されるのではなからうか。

と述べられ、各話の成立背景に加え、その時期についても具体的な考察を行われた。そして、中村義雄氏は「信貴山縁起絵巻の詞書について―覚え書ふうに―」⁽⁵⁾で、

然らばこの三本の相互関係如何となると、私見では絵巻の詞書を梅沢本(『古本説話集』のこと・筆者注)、宇治拾遺が採り入れたとはいえない。結局、当時命運の説話が広く行われ、既に説話集に採られており、それが絵画化されたのであろうという常識的な所に着かざるをえない。ただ、詞書の文は絵巻として早く定着した為に古い形を留め、梅沢本、宇治拾遺は共に轉輾書写を経ている事は確かである。

と、詞書、『古本』所収話、『宇治拾遺』所収話三話の成立背景に関して述べられた。さらに、木村紀子氏は「信濃国聖事」のなりたちとその語り手^⑥という論文で、

まず全体的な三本の関係を大雑把にいうなら、古本と宇治（とくに御所本）とはかなり近く、絵巻詞書は両者とは少し距離があるが、どちらかと言えば古本系統から出ていると見られるということである。（略）宇治と古本で異なる言葉遣いが、絵巻は古本の方に重なる場合がほとんどで、そこからすれば絵巻詞書は古本系統から派生したことが考えられるものだろう。（略）「信濃国聖事」三本の比較だけで見れば、絵巻とも近い古本がより原本的体裁を保ち、それに對し宇治は省文気味だというのが、大略の見方となるだろうか。

と考察され、『古本』所収話の方が詞書により接近した本文を備えていることを明らかにされた。

以上の先行論文から、成立時期やその先後関係を断定することはできないが、『古本』所収話が詞書により接近した内容をもつことは指摘できる。したがって、『古本』所収話本文を用

いて、詞書が欠落した第一巻の内容を考えることが可能だろう。よって以下、第一巻の内容を『古本』所収話^⑦により確認するものとし、『今昔』所収話との関係について考察を進める。

二、国宝『信貴山縁起絵巻』と『今昔物語集』卷第十一「修行僧明練始建信貴山語第三十六」

国宝『信貴山縁起絵巻』三巻ともに、命運という修行僧が登場する。『今昔』所収話にも、表記は異なるが明練という修行僧が登場する。しかし、先行論文ではこの両話に関して、詞書とはほぼ同話である「信濃国聖事」との関係ほど詳細には考察されていない。本章では、両話には明らかに共通性があり、第一巻が作成される上で、『今昔』所収話と同話の記述を参照したと考えられることを指摘する。

まず、『今昔』所収話を以下に引用する。

今昔、仏道ヲ修行ズル僧有ケリ。名ヲバ明練ト云フ。常陸ノ国ノ人也。心ニ深ク仏ノ道ヲ願テ、本国ヲ去テ、国々ノ靈驗ノ所々ニ修行スル間ニ、大和国ニ至レリ。□□郡ノ東ノ高キ山ノ峰ニ登テ見レバ、西ノ山東面ニ副テ一小山有

り。其山ノ上ニ五色ノ奇異ナル雲覆ヘリ。

明練是ヲ見テ、「定テ彼所ハ靈驗殊勝ノ地ナラム」ト思テ、其雲ヲ注ニテ尋ネ行ク。山ノ麓ニ至ヌ。山ニ登ラムト為ルニ、人跡無シト云ヘドモ、草ヲ分チ木ヲ取テ登ルニ、山ノ上ニ猶此ノ雲有リ。其所ヲ指テ登リ立チ見ルニ、東西南北ハ遙ニ谷ニテ下タリ。峰一有リ。其ノ峰ニ此雲覆ヘリ。「此ニ何ナル事ノ有ニカ」ト疑ヒ思テ、寄テ見ルニ、更ニ見ユル者無シ。只香キ香ノミ薫ジテ山ニ満タリ。然レバ、明練弥ヨ奇異ノ思ヲ成シテ、尋求ムト見ルト云ヘドモ、木ノ葉多積テ地モ不見、只指出タル物ハ大ニ喬立テル石共也。然ルニ、積リ置ケル木ノ葉ヲ搔去テ見レバ、木ノ葉ノ中ニ巖迫ニ一ノ石ノ櫃有リ。長□計、弘サ□□計、高サ□□計也。櫃ノ体ヲ見ルニ、此世ノ物ニ不似。櫃ノ面ノ塵ヲ□テ見レバ、銘有リ。「護世大悲多門天」ト。是ヲ見ルニ、貴ク悲キ事限無シ。然レバ、此櫃此ノ所ニ在シケルニ依テ、五色ノ雲覆ヒ、異ナル香薫ジケリト思フニ、涙落ツル事雨ノ如クシテ、泣々礼拝シテ思ハク、「我レ年来仏ノ道ヲ修行ジテ、諸ノ所ニ行キ至ルト云ヘドモ、未ダ如此ノ靈驗ノ地ヲ不見。然ルニ、今此ニ來テ、希有ノ瑞相ヲ見テ、多門天ノ利益ヲ可蒙シ。然レバ、今ハ我レ他所ヘ不可行。此ノ

所ニシテ仏道ヲ修業ジテ命ヲ終ラム」ト思テ、忽ニ柴ヲ折テ庵ヲ造テ、其レニ居ヌ。亦、忽ニ人ヲ催テ其櫃ノ上ニ堂ヲ造リ覆ヘリ。

大和河内ノ兩國ノ辺ノ人、自然ラ此事ヲ聞キ繼テ、各力ヲ加ヘテ此堂ヲ造ルニ、輒ク成ヌ。明練ハ、其庵ニ住シテ行フ間、世ノ人皆是ヲ貴テ訪フ。亦、訪フ人無キ時ハ鉢ヲ飛シテ食ヲ継ギ、瓶ヲ遣テ水ヲ汲テ行フニ、乏キ事無シ。

今ノ信貴山ト云、是也。靈驗新タニシテ、供養ノ後ハ于今至ルマデ多ノ僧來リ住シテ、「房舎ヲ造リ重テ住ム。外ヨリモ首ヲ低テ歩ヲ運ビ參ル人多カリトナム語り伝ヘタルトヤ。⁽⁸⁾

ここには、明練が信貴山を修行の場として選び、山林修行に勤めた姿が描かれている。明練が鉢を飛ばして人々から布施を得る場面もあり、第一巻を思い起こさせる。

この一話と国宝『信貴山縁起絵巻』に関して、下店氏は前出論文で「今昔物語の『修行僧明練始建信貴山語第卅六』の條に記するところは、拾遺と詞書とに於けるやうな切實な關係ではない。然しながらそれは要するに程度の差で、内面的なつながりに於ては密接不離であつて、大いに研究に値する何者かゝそこにある。」と述べられるにとどまり、両話に關係があること

を指摘しつつも、それ以上は論じられていない。

大串氏は前出論文¹⁰において、

つまり、今昔物語と絵巻・梅沢本・宇治拾遺とは、命運説話は殆んど「根本的に」と云つてもよいほど相異している。一致する点と云えば、1彼が信貴山に登つて毘沙門堂を建てたこと、2飛鉢の術を行つたこと、3信貴山には今も参詣人が多いことの僅か三点に過ぎない。これら三つの合致点のうち、われわれにとつて問題なのは、飛鉢のことだが、その飛鉢にしても、今昔のこれだけの記述では、その裏面に絵巻の飛倉のような大事件が秘められていると想像するのは困難である。何故ならば、今昔物語には他にも鉢や瓶を飛ばした僧の話がかなり伝えられているが、それらの話の記述ぶりから考えると、当時は飛鉢・飛瓶の術は山中で修行する僧が屢々行うものと信じられていたらしく、明練飛鉢の記述にもそれほど特別の意味を含ませてあるとは信じられないからである。(略)従つて、明練が鉢を飛ばしたと記すのは、ただ彼の徳が高かつたことを語るだけで、飛倉の奇蹟を意味するものではなく、結局のところ、今昔物語の明練説話は絵巻の話とは殆んど無関係と云うこ

とになつて来る。

と述べられ、両話の共通点を挙げながら、最終的にはほとんど無関係であると結論づけられている。

また、藤田経世氏、秋山光和氏の共著『信貴山縁起絵巻』¹¹では、

絵巻の詞や『古本説話集』とは、だいぶかけはなれている。うまれたところが、信濃(長野縣)ではなく、常陸(茨城縣)になつている。そして、國々を修行したあげく、ふしぎな雲にみちびかれて、信貴山にのぼり、「護世大悲多聞天」としてされた、石の櫃をみいだし、そのうえに堂をつくつた。いおりを、やまにかまえた明練は、鉢や瓶をとばせて、たべるものなどにことかかず、くらしていたと、しるすにとどまる。

とぶ鉢は出てくるけれども、それが倉をはこんできたとは、いつていない。醍醐天皇の病気をなおしたこと、あまぎみとのめぐりあひは、まったくしてない。どうも、できかたのちがうはなしと、みとめられる。のみならず、さまざまのふしぎなおこないが、でてこないところからすると、絵巻の詞や『古本説話集』のはなしがつくられるよ

りまえの、もつとふるい段階を、しめしているように、うけとれる。

との見解を示され、『今昔』所収話が、詞書や詞書とほぼ同文関係にある『古本』所収話より、古い内容を示すことを推量されている。

そして、笠原信夫氏は『中世の美学』¹²において「この命蓮説話ともいべきハナシは、『古本説話集』と『宇治拾遺物語』に、ほとんど同型のものが収載されて居り、さらに『今昔物語集』巻十一、第36に「修行ノ僧明練、始メテ信貴山ヲ建テタルコト」というのがみえている。もつともこれは前の三つとはかなり性格を異にしたものである。」と、『今昔』所収話を国宝『信貴山縁起絵巻』の関連説話として挙げられているものの、両話の關係に関して具体的には論じられていない。

以上より、『今昔』所収話が国宝『信貴山縁起絵巻』関連説話として取り上げられているにも関わらず、両話はかけ離れていると考えられてきたことが分かる。しかし、先行論文でも言及されている通り、両話には確かに共通性も存在する。

まず、表記は異なるが、命蓮という修行僧が登場する。そして、故郷を出て信貴山を修行の地に選び、日々修行に勤めてい

る。さらに、両話成立時の信貴山の様子として参詣者が多いことを末尾に語る点も一致している。

また両話に、鉢を飛ばして民衆から布施を得る場面を確認できる。これに関して大申氏は前出論文¹³で、「〔今昔〕所収話で、筆者注）明練が鉢を飛ばすと記すのは、ただ彼の徳が高かつたことを語るだけで、飛倉の奇蹟を意味するものではない」と述べられている。確かに、第一巻における飛鉢の方が命蓮の法力をより印象的に語り、鉢だけでなく倉も飛ぶなど、『今昔』所収話の飛鉢と内容が完全に一致するわけではない。しかし、先述した点を含め、共通性を持つ両話・両者の關係について、より深く考える必要があると思われる。

『今昔』所収話が、『古本』所収話や『宇治拾遺』所収話ほど国宝『信貴山縁起絵巻』と一致する内容を持たないことは、本文を見ても明らかである。一方で、国宝『信貴山縁起絵巻』と共通性があることは事実であり、とくに第一巻に描かれる飛鉢の描写が確認できることは注目に値する。これより、第一巻を作成する上で、『今昔』所収話と同話の記述が参照されたと指摘できるのではないか。さらに命蓮に関しても、『今昔』所収話に語られる明練をモデルとして、国宝『信貴山縁起絵巻』に登場する命蓮が作り上げられたと考えられるのではないだろう

か。次章では命蓮像に着目し、考察を進める。

三、命蓮像の変遷

本章では、『今昔』所収話に登場する明練と、国宝『信貴山縁起絵巻』に語られる命蓮がそれぞれ、山岳修行者と受戒者という、異なる性質をもつ仏教者として描かれていることに着目し、後者の命蓮が作り上げられたことを指摘する。さらに、他の飛鉢説話とも比較を行い、第一巻に語られる飛鉢から命蓮の仏教者としての姿を読み解く。

両者において最も注目すべき相違点は、受戒した僧であるか否かだと考える。『今昔』所収話に登場する明練は、受戒の事実が語られない。修行の地と決めた信貴山で山林修行に励み、鉢を飛ばして民衆から食料を得て生活を送る、山岳修行者としての姿が描かれるのみである。一方、国宝『信貴山縁起絵巻』に登場する命蓮は、第三巻「尼公巻」詞書に「このこゐの東大寺にすかいせむとてのほりしままにみえぬ」とあるように、東大寺で受戒したことが語られている。

先述の通り、両者には鉢を飛ばして民衆から布施を得るという共通点があったが、他にも鉢を飛ばして布施を得る人物が登

場する説話を確認することができる。彼らと二人の命蓮を比較することにより、受戒者という性質が命蓮独自のものであることを指摘できる。

以下、命蓮以外に鉢を飛ばして布施を得る人物が登場する説話において、鉢を飛ばす人物について語る部分を抜粋し、表にまとめた。

表 飛鉢関連説話^⑤

書名・巻	題名	本文(抜粋) ※○内は筆者
一 「本朝神 仙伝」	「比良山僧事 第三十五」	比良山僧 <small>キ</small> 神験無方也。兼学仙道、又行飛鉢法。来大津船、此鉢不去。侠少水手。頗厭此鉢。以米一俵、投置鉢上。此鉢飛去、在船中俵、皆悉相隨。如秋雁之点雲宵。鋼丁以婦命頂礼。其後米反舟中。
二 「続本朝 往生伝」	「三三」	大宋国に到りて、安居の終りに、衆僧の末に列りぬ。かの朝の高僧、飛鉢の法を修して、齋食を受くるの時に、自ら行き向はず。次で寂照に至る。心の中に大きに恥ぢて、深く本朝の神明仏法を念じて、食頃に観念せり。ここに寂照の鉢、飛びて仏堂を繞ること三匝して、齋食を受けて来れり。

六	五	四	三
『発心集』	『今昔物語集』卷二十	『今昔物語集』卷十九	『今昔物語集』卷第十
「二、淨藏貴所、鉢を飛ばす事」	「染殿后、为天宮被燒乱語第七」	「参河守大江定基出家語第二」	「聖人、犯后蒙國王咎成天狗語第三十四」
淨藏貴所と聞こゆるは、善宰相清行の子、並びなき行人なり。山にて鉢の法を行ひて、鉢を飛ばしつ過ぎける比、ある日、空しき鉢ばかり帰り来て、入る物なし。	而ル間、大和葛木ノ山ノ頂ニ、金剛山ト云フ所有リ。其山ニ一人ノ貴キ聖人住ケリ。年来此所ニ行テ、鉢ヲ飛シテ食ヲ継ギ、瓶ヲ遣テ水ヲ汲ム。如此ク行ヒ居タル程ニ、験無並シ。	（齋会にて）寂照思ヒ煩テ、心ヲ至テ、「本国ノ三宝助ケ給ヘ。我レシ鉢ヲ不令飛ズハ、本国ノ為ニ極テ恥也」ト念ズル程ニ、寂照ガ前ナル鉢、俄ニ拍鷗ノ如ククルク、ト転テ、前ノ鉢共ヨリモ疾ク飛テ行テ、僧供ヲ請テ返ヌ。	今昔、震旦ノ□□代ニ、□□ト云フ所ニ、遙二人氣ヲ遠ク去テ深キ山ノ幽ナル谷ニ、柴ノ庵ヲ造テ戸ヲ閉テ、人ニモ不被知レテ年来行フ聖人有ケリ。此ノ聖人、年来ノ行ノ力ニ依テ、護法ヲ仕テ、鉢ヲ飛バシテ食ヲ継ギ、水瓶ヲ遣テ水ヲ汲マス。然レバ、□□人無シト云ヘドモ、諸ノ事思ヒニ叶テ、乏キ事無シ。

十	九	八	七
『元享釈書』卷第十五	『元享釈書』卷第十四	『宇治拾遺物語』卷下	『古事談』卷第三
「越知山泰澄」	「山崎寺慈信」	「第一七二 寂照上人、飛鉢事」	「一九」
米斛争可運移。淨定返船所。其米如前飛還。余尽還汝。淨定曰、今此峰巒、崎嶇擗量許多。汝向彼謝之。淨定如教。沙弥曰、只留小供、願還供余。澄笑曰、非我所知、小沙弥之為也。入峰礼澄曰、卑心多貧、悖師淨供。而是官租。船中斛米如雁相連飛來峰頂。淨定嘆未曾有。船師神淨定曰、此官米有定數、不足充供。時五年、羽州官租馳舟而過。弥又飛鉢乞米。船沙弥逢北海稅船、飛鉢乞供、率以為常。和銅	積慈信。有神異。常飛鉢乞食。故世號空鉢上人。	（齋廷にて）日本の方に向て、祈念して云、「我國の三宝、神祇助給へ。恥見せ給な」と念じ入てゐたる程に、鉢、こまつぶりのやうにくるめきて、唐の僧の鉢よりも早く飛て、物を受けて帰ぬ。	淨藏貴所、住山の時、鉢の法を行ひて、鉢を飛ばして過ぎしける比、三ヶ日鉢空しくて帰り来たたりければ、不審に依りて、四日と云ふ日、鉢の帰り来たたる山の峯にて見れば、我が鉢玉城の方より物入れて来たるを、北方より他の鉢来たたり会ひて、此の鉢の物を移し取りて飛び去り了んぬ。

十一書 卷第一「法道仙人」 十八	大化元年秋八月、船師藤井載官租而過。道飛鉢乞供。藤井曰、御厨精糶、不違私情。鉢便飛去。於是乎船中群米、隨鉢飛連、猶如雁陣入山中。藤井大驚、奔到庵所、悔謝乞憐。道笑而諾、言己米石如前飛帰。其米千石、無有遺失。
---------------------	---

表より、齋会において鉢を飛ばし食料を得る二、四、八番と、鉢を飛ばす人物に関する描写が詳細でない九番の説話を除き、山林修行に勤める者が、鉢を飛ばして布施を得る点が共通していることが明らかである。一方、『今昔』所収話の明練同様、彼らが受戒者であると語られることはなく、第一巻において鉢を飛ばす命蓮の仏教者としての性質は、新たに作り上げられたものであると考えられるだろう。

さらにここで、『今昔』所収話と第一巻に語られる飛鉢の描写に注目したい。第一巻では命蓮が鉢を飛ばして布施を得るだけでなく、鉢が長者宅の倉を載せて飛んで行き、命蓮は倉のみを留め置き、追ってきた長者一行に米俵は全て返す、というエピソードが語られる。

注目すべきは、『今昔』所収話において「大和河内ノ両国ノ辺ノ人、自然ラ此事ヲ聞キ継テ、各力ヲ加ヘテ此堂ヲ造ルニ、輒ク成ヌ。」と、修行に勤める明練を慕う在家の人々が、明練

に堂舎を寄進したことが記されている点である。「大和河内ノ両国ノ辺ノ人」とは、第一巻に登場する長者と、様々な表情に描かれる在家の人々を思い起こさせる。以上からも、前章で考察した通り、第一巻に描かれたエピソードが『今昔』所収話と同話の記述を参照し、モノガタリ化されたことを指摘させる。つまり、第一巻において命蓮が鉢を飛ばす行為からも、在家による堂舎寄進を通して民衆との関係を築く、仏教者命蓮の姿を読み取ることができるのではないだろうか。

四、第一巻「山崎長者巻」の意義

前章での考察を踏まえ、本章では第一巻における飛鉢・飛倉から、仏教者命蓮の姿を読み解き、第一巻の意義を考察する。そこで、命蓮が倉を留め置いた点と、中身の米俵は全て長者へ返した点に着目し、前者は長者から命蓮への堂舎寄進と造堂の功德を、後者は命蓮が受戒者として食料備蓄に関する戒律を重んじる態度を語ることを指摘する。そしてこの巻が、在家の善知識として仏道を勧める仏教者と、仏教者により功德を得る在家を語る一巻であったと解釈できることを指摘する。

従来、第一巻における飛鉢は、命蓮が布施を怠った長者に怒

りこらしめるための行為であると解釈されてきた。以下、先行論文を挙げる。

まず、菊地勇次郎氏は「飛鉢の法」⁽⁶⁾で、「飛鉢の法と云えば信貴山縁起絵巻に命蓮という聖が、飛鉢の法を修して麓の長者の不徳を戒める話が、飛倉の巻と呼ばれる一巻になつてゐる。」と述べられ、飛鉢を長者を戒めるためと解釈された。

また、藤田氏、秋山氏の前出共著では、「『本朝神仙伝』「比良山僧事 第三十五」は・筆者注）絵巻のはなしと、おどろくほどよくにている。（鉢が倉を載せて飛んで行ったのは筆者注）じゃまにされたのを、おこつてのしわざであるのも、あやまる、もとのところにこめがかえるのも、そっくりである。」と、飛鉢を命蓮が布施を怠つた長者に怒つたためだと説明された。さらに、並木誠士氏は「縁起としての信貴山縁起絵巻」⁽⁸⁾で、

上巻飛倉の巻は、命蓮が法力で鉢や米俵を飛ばす話である。信貴山上に住む命蓮は、しばしばふもとの山崎の長者の家に鉢を飛ばして食糧を得ていた。ある日それに腹を立てた長者が鉢を米倉に閉じこめておいたところ、怒つた鉢が米倉を乗せて命蓮のもとに飛び去ってしまった。米倉を返して欲しいという長者に対して、命蓮は、倉はそのまま、

中の米俵だけ返すといい、法力を使って長者の家へ米俵を飛ばした、というもの。

と第一巻を説明され、飛鉢は命蓮が怒つてのことだと解釈された。そして、泉武夫氏は『躍動する絵巻に舌を巻く 信貴山縁起絵巻』⁽⁹⁾において、

そこにいるのは命蓮聖。長者のケチをちと懲らしめるために、倉を差し押さえたということらしい。この結果を招いたのは長者側のちよつとした不注意のだが、富をもてる者は、もたざる者たちに対してついつい傲慢になつてしまふ、という寓意が込められているようだ。聖もお仕置きがすぎたと思つたのか、ふたたび法力をふるつて奇跡を起こす。（略）

命蓮は、長者を戒めるのもこれくらいにしておこうと、米を返すことにする。ただし倉は置いておくこと、という条件つき。いやはや長者にとつて、鉢をほうっておいた落ち度は高くついたものだ。

と、飛鉢は長者を懲らしめ戒めるためだと解釈された。

しかし、命蓮は本当に長者をこらしめるために米倉を奪ったのだろうか。第一巻における飛鉢の目的が長者をこらしめることであつたとすれば、命蓮は何故に米俵を全て長者に返したのだろうか。そして何故に、倉を返さなかつたのだろうか。

筆者は、第一巻に語られる命蓮の事績は、僧侶が強欲な在家を懲らしめ反省を促すという昔話のような、一般的に知られているエピソードを思い起こさせる仏教者の行為ではなく、何らかの戒律に基づく仏教者としての行為だと推量する。そこでまず、命蓮が倉を留め置いた点に着目し、考察を進める。

造堂・造塔、つまり堂舎や塔を造り寄進する行為は、在家の人々の信仰を象徴する行為であつた。在家が功德を得ることを保証する布施という行為は、釈迦そして釈迦が打ち立てた教団に、須達長者が食料や祇園精舎を寄進した有名なエピソードに始まる。仏説菩薩本行経などの仏典において有名な在家の寄進譚だが、以下にはその翻案を収載する『今昔物語集』巻第一「須達長者、造祇園精舎語第三十一」と題された一話を引用する。

今昔、天竺ノ舍衛国ニ一人ノ長者アリ。名ヲバ須達ト云フ。其ノ人、一生ノ間ダニ七度富貴ニ成リ、七度貧窮ニ成レリケリ。其ノ第七度ノ貧ハ前ノ六度ニ勝レタリ。牛ノ衣

計ノ着物無シ。菜ニ合ス計ノ食味無シ。然レバ、夫妻共ニ歎キテ世ヲ過ス程ニ、近隣ノ人ニモ憎レヌ、親族ニモ厭ハレヌ。

而ル間、全ク三日不食シテ既ニ餓死シナムトスルニ、一塵ノ財ヲ無シト云ドモ空キ倉計ハ有ルニ行キテ、塵計ノ物ヤ有アルト見レバ、梅檀ノ升ノ片角破レ残テ有ケリ。此ヲ見得テ、須達自ラ市ニ行テ、米五升ニ売テ家ニ持テ来テ、一升ヲバ取テ菜ヲ買ハムガ為メニ、又市ニ出ヌ。其ノ程ニ、妻一升ヲ炊テ須達ヲ待ツ程ニ、仏ノ御弟子、解空第一ノ須菩提来テ食ヲ乞フ。妻鉢ヲ取り、其ノ炊タル飯ヲ一粒ヲ不残サズ供養シツ。然バ、又一升ヲ炊テ夫ヲ待程ニ、又神通第一ノ目連来テ食を乞フ。又前ノ如クニ供養シツ。然バ、又一升ヲ炊テ夫ヲ待程ニ、多聞第一ノ阿難来テ食ヲ乞フ。前ノ如ク供養シツ。其ノ後、妻独リ思フ様、「米今一升残レリ。白ク精ゲテ炊テ、夫妻共ニ此レヲ食セム。此ヨリ後ニハ、何レノ御弟子来リ給フト云トモ敢テ供養シ奉ラジ」ト、「先ツ我が命ヲ繼」ト思ヒ得テ炊クニ、未ダ須達ノ不返ザル程ニ、大師釈尊来リ給テ食ヲ乞給フ。妻サコソ云ツレドモ、仏ノ来リ給ヘルヲ見奉テ、随喜ノ涙ヲ拭テ礼拝シテ、皆供養シ奉リツ。其時ニ仏、女ノ為ニ偈ヲ説テ宣ハク、

貧窮布施難 富貴忍辱難 厄嶮持戒難 小時捨欲難

如此キ説キ聞セ給テ返リ給ヒヌ。

其後、酒達返り来レルニ、妻、羅漢及ビ仏来リ給ヘル事ヲ夫ニ語ル。夫ノ云ク、「汝ゾ、我が為メニ生、世、ノ善知識也」ト云テ、妻ヲ喜ブ事無限リナシ。其ノ時ニ、自本有ル三百七十ノ庫藏二本ノ如クニ七宝満ヌ。其ヨリ又富貴無並カリケリ。此ノ度ノ富、又前六度ニ倍倍セリ。然レバ長者、永ク世ニ名ヲ擧テ閻浮提ノ内ニ並ブ者無シ。而ル間、長者心ノ内ニ思ハク、「我レ勝地ヲ求テ伽藍一院ヲ建立シテ、食損及御弟子等ヲ居奉テ、一生間日、ニ供養シ奉ラム」ト思フ心深シ。

其ノ時ニ、一人ノ太子有アリ。名ヲバ祇陀ト云フ。此ノ人、甚ダ目出キ勝地ヲ領リ。水・竹左右ニ受ケ、草・樹前後ニ並ベリ。須達太子ニ語テ云ク、「我レ仏ノ御為メニ伽藍ヲ建立セムト思フニ、此ノ地足レリ。願クハ太子、此ノ地ヲ我レニ与へ給へ」ト。太子答テ云ク、「此ノ地ハ東西十里、南北七百余歩也。当国・隣国ノ豪族ノ人来テ乞ト云ドモ于今不与ズ。但シ、汝ガ云フ事ニ至テハ既ニ仏ノ御為ニ伽藍ヲ建立セムト也。敢テ惜ム心無シ。然レバ、地ノ上ニ金ヲ六寸敷テ直ニ得シメヨ」ト。須達太子ノ言ヲ聞テ、喜ブ事

無限ナシ。忽ニ車馬・人夫ヲ以テ金ヲ運テ、地ノ上ニ厚サ五寸ヲ敷キ満テ、太子ニ与ツレバ、長者思ノ如ク地ヲ得ツ。

其ノ後チ、伽藍ヲ建立シテ二百余院ノ精舎ヲ造ル。其ノ莊嚴微妙ニシテ嚴重ナル事無限ナシ。中殿ニハ仏ヲ居ヘ奉リ、院、房、ニハ深智ノ菩薩等及ビ五百ノ羅漢等ヲ居ヘ奉テ、心ニ随テ百味ヲ運ビ備ヘ、珍宝ヲ満置テ、二十五箇年ノ間、仏及ビ菩薩・比丘僧ヲ供養シ奉ル。祇洹精舎ト云フ、此レ也。須達ガ妻ノ善知識ニ依テ、最後ノ富貴ヲ得テ、思フガ如ク伽藍ヲ建立シテ仏ヲ供養シ奉レル也ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。²⁰

貧窮に陥っていた須達長者が市で調達した米を、妻が様々な神仏に全て布施として捧げると、長者の家はたちまち裕福になる。ついには、長者が広大な土地に寄進し、伽藍も建立して教団に寄進し、二十五年の間、仏や菩薩、比丘僧などの生活を支え、富貴を得たことが記されている。これは造堂の功德を語る一話であり、在家信者が僧侶や教団に布施や寄進を行うことが、功德を得る機縁であったことを確認できる。

またこの一話から、須達長者と山崎長者との共通点も指摘できる。最初に布施として供えたのが米であり、最終的には伽藍

を寄進するという内容だからである。第一巻において長者が

日々、命蓮に米を布施していたこと、そして命蓮が倉のみを留め置くことで、結果として倉、つまり堂舎を寄進するに至ったと解釈することで、第一巻は須達長者譚を原拠に作成されたエピソードであることも指摘できるのではないだろうか。

また、在家が仏教者に堂舎を寄進するエピソードは、須達長者を先行事例として認識されていたことを、以下の資料で確認することができる。

『澄憲作文集』⁽²¹⁾

第廿四 堂舎

夫尋堂舎功德者 天竺三云伽藍 此翻精舎 是即諸仏之淨刹
賢聖之道場也 亦名金剛淨刹三世諸仏以此処 為堅固寂靜
依処之故也 亦名寂滅道場 十方如來於此砌 得阿耨菩提
故也 興造者得七主之功德 礼敬人生三万之善根 須達卜
勝地宮土木 兼都卒内院感果報 夜闍改旧宅作仁祠 追無
数天子來申供養 闍賓沙弥加旧杖於修造 転非命業 佩
長生府 舎衛奴婢掃 精舎於會場 成切利天子 得法眼
淨 勗立一字 等一万三千供仏 向運七歩 滅七千万却罪
障 拾木葉学寺 聚砂興塔 童子遊小兒戯 猶能菩提之因

乎 況尽七宝投万物 造立供養功德 凡縁因種子数多 事
理之善根普有 於堂舎塔妙之功德者 其中尤第一也矣

『言泉集』「堂供養帖」⁽²²⁾より抜粹

夫建立堂舎尊重佛法其儀實久其跡實遐源出月氏五天之堧流
及日域九州之地上自國王大臣三藏大師等下至長者居士國宰
黎民崇三寶之處以之為基歸十力之地以之為源故道樹正覺之
始龍王建寂滅道場普光寶堂桑苑轉法輪之後須達造給狐獨蘭
祇洹精舎大覺栖其中多年衆聖鳩此砌幾日佛日隱西梵風扇東
漢明白馬之風永平功成吳・王赤鳥之日建初構榷新我朝欽明
聖朝法雨灑此土推古治世梵風扇我朝以、來上官太子建天王
寺人知釋尊轉輪之古跡聖武天皇立東大寺世禮遮那生覺之新
儀遂使幾、内幾外佛閣比甍古、京新、京精舎連基 鎌藏葉
師堂供養勝賢僧正誂

夫伽藍者三寶住處也精舎者萬善根本也崇佛禮那必起、立之
弘法資師定興造之是、似西天竹林祇園之精、舎為佛陀建之
云々東漢白馬青龍之寺院為興、法造之 治部卿顯信持佛堂供
養

夫以西天聖王之法遙傳日域之雲東方君子國悉仰月氏之風傳燈三國之道遍弘此土末法萬年之教專留我朝然佛像經卷住持三寶已以之爲無上敬田堂舍塔婆三寶依處也以之爲取勝道場故崇佛崇法古先帝皆卜勝地建精舍傳道傳法諸大師悉默靈崛立伽藍堂塔之要須其義以且此 加茂神主重安堂供養

夫須達長・跪尺尊往祇園之昔雖建寶殿不造佛像月蓋曲窮彌陀來門闢之古雖模金容不起堂舍方今、聖應隱而二千年眼永隔眞身佛教傳而五千卷人多造形像是以佛像經卷者住持三寶也以之爲無上福田堂舍塔廟者依止衆園也以之爲取勝道場故漢明白馬之寺永平之風遙傳推古青龍之地難波之流猶盛、凡崇佛崇僧古先帝皆卜勝境建精舍傳道傳法諸大師悉默靈地開伽藍 伊豆堂供養

これらは、安居院流唱導の例文集として編纂されたテクストである。在家が仏教者あるいは仏教教団に堂舎や塔を寄進した折の功德を讃える、表白や施主段を作文する折に用いられた例文であったわけだが、傍線を施したように、必ずと言ってよいほどに、須達長者の事績が先例として挙がっていることを確認できる。

以上の資料と第一巻との共通点から、命蓮が倉を留め置いたのは長者から倉、つまり堂舎を寄進されたと捉えたためであり、これによって得られた造堂の功德を語る行為であると解釈できるだろう。

次に、命蓮が米俵は全て長者に返した点に着目する。仏教者には、食料を寄進・布施される場合、注意しなければならないことがある。そこで以下、『今昔物語集』巻第十九「以仏物餅造酒見蛇語第二十一」を引用する。

今昔、比叡ノ山ニ有ケル僧ノ、山ニテ指ル事無カリケレバ、山ヲ去テ、本ノ生土ニテ、撰津ノ国□□ノ郡ニ行テ、妻ナド儲テ有ケル程ニ、其ノ郷ニ自然ラ法事ナド行ヒ、仏經ナド供養ズルニハ、多クハ此ノ僧ヲ呼懸テ、講師ナドヲシケリ。才賢キ者ニハ無ケレドモ、然様ノ程ノ事ハ心得テシケレバ、修正ナド行ニモ、必ズ此ノ僧ヲ導師ニシケリ。其ノ行ヒノ餅ヲ此ノ僧多ク得タリ。人ニモ不与テ家取置タリケルヲ、此ノ僧ノ妻、「此ノ多ノ餅ヲ無益ニ子共ニモ從者共ニモ食セムヨリハ、此ノ餅ノ久ク成テ□□タラム破集メテ、酒ニ造ラバヤ」ト思ヒ得テ、夫ノ僧ニ「此ナム思フ」ト云ケレバ、僧、「糸吉カリナム」ト云合セテ、酒ニ

造テケリ。

其後、久ク有テ其ノ酒出来スラムト思フ程ニ、妻行テ、其ノ酒造タル壺ノ蓋ヲ開テ見ルニ、壺ノ内ニ動ク様ニ見ユ。「怪」ト思フニ、暗テ不見エネバ、火ヲ灯シテ壺ノ内ニ指入テ見ルニ、壺ノ内ニ大ナル小サキ蛇一壺、頭ヲ指上テ蠢キ合タリ。「穴怖シ。此ハ何ニ」ト云テ、蓋ヲ覆テ逃テ去ヌ。夫ニ此ノ由ヲ語ルニ、夫、「奇異キ事カナ。若シ妻ノ僻目カ」ト「我レ行テ見ム」ト思テ、火ヲ燃シテ壺ノ内ニ指入テ臨クニ、実ニ多ノ蛇有テ蠢ク。然レバ、夫モ愕テ去ヌ。然テ、壺ニ蓋ヲ覆テ、「壺乍ラ遠ク棄ム」ト云テ、搔出テ遠キ所ニ持行テ、広キ野ノ有ケルニ窃ニ棄ツ。

其ノ後、一両日ヲ経テ、男三人其ノ酒ノ壺棄タル側ヲ過ケルニ、此ノ壺ヲ見付テ、「彼レハ何ゾノ壺ゾ」ト云テ、一人ノ男ヲ寄テ壺ノ蓋ヲ開テ臨クニ、先ヅ壺ノ内ヨリ微妙キ酒ノ香匂出タリ。奇異クテ、今二人ノ男ニ、「此」ト云ヘバ、二人ノ男モ寄テ共ニ臨クニ、壺ニ酒一壺入タリ。三人ノ男、「此ハ何ナル事ゾ」ナムド云フ程ニ、一人ガ云ク、「我レ只此ノ酒ヲ吞テバヤ」ト。今二人ノ男、「野ノ中ニ此ク棄テ置タル物ナレバ、ヨモ只ニテハ不棄ジ。定テ様有ル物ナラム。怖シ氣ニ。否不吞ジ」云ヒケルヲ、前ニ吞ト云

ツル男極タル上戸ニテ有ケレバ、酒ノ欲サニ不堪シテ、「然ハレ、其達ハ否不吞ゾ。我ハ譬ヒ何ナル物ヲ棄置タル也トモ、只吞テム。命モ不惜ラズ」ト云テ、腰ニ付タリケル具ヲ取出テ、指救テ一坏吞タリケルニ、実ニ微妙キ酒ニテ有ケレバ、三坏吞テケリ。今二人ノ男此ヲ見テ、其レモ皆上戸也ケレバ、「欲」ト思テ、「今日此ク三人烈ヌ。一人ガ死ナムニ、我等モ見棄テムヤハ。譬ヒ人ニ被殺ルトモ、同じクコソハ死ナム。去来我等モ吞テム」ト云テ、二人ノ男モ亦吞テケリ。世ニ不似ズ美キ酒ニテ有ケレバ、三人指合テ、「吉ク吞テム」ト云テ、大ナル壺也ケレバ、其ノ酒多カリケルヲ、指荷テ家ニ持行テ、日来置テ吞ケルニ、更ニ事無カリケリ。

彼ノ僧ハ少ノ智リ有ケレバ、「我ガ仏物ヲ取集メテ、邪見深キガ故ニ、人ニモ不与スシテ酒ニ造タレバ、罪深クシテ蛇ニ成ニケリ」悔恥テ有ケル程ニ、其ノ後、程ヲ経テ、「其々ニ有ケル男三人コソ其ノ野中ニテ、酒ノ壺ヲ見付テ、家ニ荷ヒ持行テ吉ク吞ケレ。実ニ微妙キ酒ニテコソ有ケレ」ナド語ケルヲ、僧自然ラ伝ヘ聞テ、「然ラバ蛇ニハ、非ノ深キガ故ニ、只我等ガ目許ニ蛇ト見エケル也ケリ」ト思テ、弥ヨ恥悲ビケリ。

此レヲ思フニ、仏物ハ量無ク罪重キ物也ケリ。現ニ蛇ト見エテ蠢キケム、極テ難有ク稀有ノ事也。然レバ尚然様ナラム仏物ヲバ、強ニ不貪ズシテ、人ニモ与へ、僧ニモ可令食キ也。

此ノ事ハ彼ノ酒呑タリケル三人ノ男ノ語ケル也。亦僧モ語ケルヲ聞繼テ、此ク語り伝ヘタルトヤ。⁽²³⁾

この一話には、僧が妻と計画して供物である餅を備蓄して酒を造り、後日酒の入った壺をのぞくと、完成しているはずの酒が蛇になっていたと記されている。次に、同書同巻に収載される「寺別当許麦繩成蛇語第二十二」を引用する。

今昔、□□寺ノ別当ニ□□ト云フ僧有ケリ。形チ僧也ト云ヘドモ、心邪見ニシテ、明暮ハ諸ノ京中ノ人ヲ集メテ遊ビ戯レテ、酒ヲ呑ミ、魚類ヲ食シテ、聊モ仏事ヲバ不営ザリケリ。常ニ遊女傀儡ヲ集メテ、歌ヒ嘲ケルヲ以テ役スト。然レバ恣ニ寺ノ物ヲ欺用シテ、夢許モ此レヲ怖ル心無カリケル。

而ル間、夏比麦繩多ク出来ケルヲ、客人共多ク集テ食ケルニ、食残シタリケルヲ、「少シ此レ置タラム。『旧麦ハ葉』

ナド云メレバ」ト云テ、大ナル折櫃一合ニ入テ、前ナル間木ニ指上テ置テケリ。其ノ後、要無カリケレバ、其ノ麦入レタル折櫃ヲ取り下シテ見ル事モ無カリケリ。

而ル間、亦ノ年ノ夏比ニ成テ、別当彼ノ麦ノ折櫃ヲ不意ニ急キト見テ、「彼レハ去年置シ麦繩ゾカシ。定メテ損ジヌラム」ト云テ取下サセテ、折櫃ノ蓋ヲ開テ見レバ、折櫃ノ内ニ麦ハ無クテ、小キ蛇蟠テ有リ。開クル者思ヒ不懸ヌ事ニテ、棄テツ。ヤガテ別当ノ前ニテ開ケレバ、別当モ亦他ノ人々モ少々見ケリ。「仏物ナレバ此ク有ル也ケリ」ト云テ、折櫃ノ蓋ヲ覆テ河ニ流シテケル。其レモ現ノ蛇ニテヤハ有ケム、只然見エケルニコソハ。

思フニ、増シテ誦経ノ物、金鼓ノ米ナドコソ思ヒ被遣レ。然レバ仏物ハ量無ク罪重キ物也ケリ。

正シク其ノ寺ノ僧ノ語ケルヲ聞繼テ、此ク語り伝ヘタルトヤ。⁽²⁴⁾

ここでも、僧が備蓄したそうめんを消費しようとしたところ、蛇に変わっていたという一話が確認できる。

仏教者が在家に布施される食料はその日食べる分だけであり、備蓄するほど得てはいけなかった。食料を得ることも、戒

律によって禁止されていたわけである。日本の仏教者が戒律を守らない状況は、平安時代においても顕著であったことが知られている。一方、命蓮はその日食べるに余る米を備蓄することを嫌い、長者に全て返したと解釈できるだろう。戒律を厳格に守る、仏教者としての姿勢を読み取ることができる。

第一巻では、在家である長者が自ら意図していたか否かに関わらず、命蓮に倉を寄進することとなり、造堂の功德にあずかることが約束されたわけである。つまり、長者は命蓮を善知識として、在家でありながら功德を得ることができたと解釈できる。さらに、仏教者として戒律を重視する命蓮の態度も読み解くことができた。したがって、第一巻は在家の民衆を対象とする仏教者命蓮の教化を語り、両者の理想的な関係が築かれていく、機縁となるエピソードを語った巻であったと解釈しておきたい。

まとめ

小稿では、国宝『信貴山縁起絵巻』第一巻「山崎長者巻」を取り上げ、『今昔』所収話に登場する明練との比較から命蓮像の変遷を、さらには第一巻の意義を考察した。

『今昔』所収話における明練と国宝『信貴山縁起絵巻』に語られる命蓮とは、仏教者として性質が異なる点を指摘した。また、他の飛鉢説話とも比較した結果、第一巻に語られる命蓮のみ、山岳修行者という性質に加え、受戒者としても語られていることが明らかとなった。以上に確認できる命蓮像の変遷と、『今昔』所収話と第一巻に確認できる飛鉢の場面から、『今昔』所収話と同話の記述を参照して第一巻が作成され、さらには『今昔』所収話の明練をモデルに、国宝『信貴山縁起絵巻』の命蓮が作り上げられたと考えられることを指摘した。

また、第一巻の意義に関して、飛鉢・飛倉に着目し考察を進めた。第一に、命蓮が倉のみを留め置いた点から、須達長者の事例や安居院流唱導の例文集を先例として確認できるように、命蓮が倉を長者からの堂舎寄進と捉え、造堂の功德を得る長者を語るものと解釈できた。第二に、命蓮が長者に米俵を全て返した点から、『今昔物語集』に収載の説話にも確認できるように、命蓮が戒律で禁じられる食料の備蓄を嫌ったが故の行為だと解釈でき、仏教者として戒律を重視する姿勢を読み解いた。以上より、第一巻は在家の善知識として仏道を勧める仏教者と、仏教者により功德を得る在家を語る一巻であったと解釈できるわけである。

〔注〕

- (1) 『美術研究』六六、一九三七年六月
- (2) 『画説』四八、一九四〇年十二月
- (3) 『美術研究』一五二、一九四八年十二月
- (4) 『国華』七三二、一九五三年三月
- (5) 『画説』四八、一九四〇年十二月
- (6) 『奈良大学紀要』二八、二〇〇〇年三月
- (7) 三木紀人氏、浅見和彦氏、中村義雄氏、小内一明氏校注『宇治拾遺物語 古本説話集』（『新日本古典文学大系四二』岩波書店、一九九〇年）
- (8) 馬淵和夫氏、国東文麿氏、稲垣泰一氏校注・訳『今昔物語集①』（『新編日本古典文学全集三五』小学館、一九九九年）
- (9) 前出論文、注（1）
- (10) 前出論文、注（4）
- (11) 東京大学出版会、一九五七年
- (12) 桜楓社、一九六七年
- (13) 前出論文、注（4）
- (14) 奈良国立博物館編『国宝 信貴山縁起絵巻―朝護孫子寺と毘沙門天信仰の至宝―』（奈良国立博物館、二〇一六年）
- (15) 本文抜粋・引用順に、参考文献は以下の通り。川口久雄氏校注『日本古典全書「古本説話集」』（朝日新聞社、一九六七年）、井上光貞氏、大曾根章介氏校注『往生伝 法華験記』（『日本思想大系七』岩波書店、一九七四年）、小峯和明氏校注『今昔物語集二』（『新日本古典文学大系三四』岩波書店、一九九九年）、馬淵和夫氏、国東文麿氏、稲垣泰一氏校注『今昔物語集②』（『新編日本古典文学全集三六』小学館、二〇〇〇年）、小峯和明氏校注『今昔物語集四』（『新日本古典文学大系三六』岩波書店、一九九四年）、三木紀人氏校注『新編日本古典集成 方丈記 発心集』（新潮社、一九七六年）、川端善明氏、荒木浩氏校注『古事談 続古事談』（『新日本古典文学大系四一』岩波書店、二〇〇五年）、三木氏、浅見氏、中村氏、小内氏校注前出書（注七）、黑板勝美氏編『日本高僧傳要文抄 元亨釋書』（『新訂増補国史大系第三十一卷』吉川弘文館、一九三〇年）
- (16) 『日本歴史』第二八号、一九五〇年九月
- (17) 前出書、注（11）
- (18) 『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告「人文」』四五、一九九七年三月
- (19) 小学館、二〇〇四年

- (20) 今野遠氏校注『今昔物語集一』（『新日本古典文学大系
三十三』岩波書店、一九九九年）
- (21) 秋山虔氏編『中世文学の研究』（東京大学出版会、
一九七二年）
- (22) 永井義憲氏、清水宥聖氏編『安居院唱導集上卷』（『貴重
典籍叢刊六』角川書店、一九七二年）
- (23) 馬淵氏、国東氏、稲垣氏校注前出書、注（15）
- (24) 同右

（おおにし）はるか／本学大学院生